

教員名	菅 聡子 (KAN Satoko)
所 属	人間文化研究科国際日本学専攻総合日本学講座
学 位	博士 (人文科学) (2000 お茶の水女子大学) 「尾崎紅葉・樋口一葉の文学—〈近代〉をめぐる物語—」
職 名	教授
URL / E-mail	kan.satoko@ocha.ac.jp

## ◆研究キーワード

日本近現代文学 / 女性表現 / ジェンダー / メディア / 表象分析

## ◆主要業績

総数 ( 17 ) 件

- ・単著「宮本百合子『一本の花』 分節化されない言葉」(『国文学解釈と鑑賞』2006年4月、pp106-113)
- ・単著「樋口一葉と〈和歌〉」(勝原晴希編『和歌をひらく第五巻 帝国の和歌』岩波書店、2006年6月、pp113-133)
- ・単著「〈女手〉の叛逆者—田辺聖子論」(『田辺聖子全集 別巻』集英社、2006年7月、pp359-420)
- ・単著「川上弘美『センセイの鞆』 埋められない距離の物語」  
(岩淵宏子ほか編『ジェンダーで読む愛・性・家族』東京堂出版、2006年9月、pp88-99)
- ・単著「女性同士の絆—近代日本の女性同性愛—」(『お茶の水女子大学 国文』106号、2006年12月、pp24-39)

## ◆研究内容

近代日本の国民国家化のプロセスにおける、女性表現の参与という問題の枠組みにたち、樋口一葉を具体的な分析対象として、女性作家がどのような形で国民化され、またそれにあらがうのかを考察した。これは、ここ数年、継続している関心の一環である。

また、戦後日本文学の再検討という視座から、田辺聖子の文学について、その全体像の検討、また現代的問題意識にたつての再評価を行った。全集の編集にここ数年携わり、その集大成として全集別巻に田辺論を収録。なお、この全集刊行を直接の対象として、田辺聖子は2006年度朝日賞を受賞した(2007年1月授与)。

さらに、表象分析の問題意識から、現代日本におけるサブカルチャーと、村上春樹文学との関連から見いだせる現代文学の問題について、考察した。

2006年度は、これらに加えて、海外での研究発表の機会を複数持った。それぞれにおいて、明治近代をめぐる新しい問題設定を提起した。

## ◆教育内容

学部の授業においては、日本近現代におけるキャンソンの批判的再検討の見地から、明治以降、現在にいたるまでの女性表現を時系列的に考察する講義をもった。また、サブカルチャーと現代日本社会の問題を前景化すべく、「戦争とジェンダー」をテーマに、グローバル文化学環で講義をもった。

大学院においては、女性読者とベストセラー小説の関連をみる見地から、徳富蘆花『不如帰』を分析対象として、演習と講義をミックスさせた形式の授業を行った。

また、主査として担当する大学院生(含・留学生)に対しては、個々の研究の進展を促すべく、論文指導を中心に、指導をおこなった。また、国内外での口頭発表を慫慂した。

## ◆共同研究例

---

現在、お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム「ジェンダー研究のフロンティア」、「出版機構の変化と原稿料についての研究（科研費）」等に参加。

## ◆共同研究可能テーマ

---

- ・ジェンダー
- ・現代日本サブカルチャーにおける表象分析

## ◆将来の研究計画・研究の展望

---

女性作家の国民国家への参与を分析・考察するにあたり、その「文学的感傷」性を視座として、女性読者との連帯も視野に入れつつ、分析・考察を続ける予定。

## ◆受験生等へのメッセージ

---

文学研究は、ともすれば現実社会とコミットしていないと考えられがちだが、それは誤りである。私たちは、つねに「物語」のなかを生き、ときに、より「大きな物語」による抑圧を受ける。そのような抑圧にあらがうために、私たちは「物語」自身のみならず、その「物語」を発信・受容するシステムや、「物語」のコンテクストを読み解く力を持たなければならない。そのような広い意味でのリテラシーを得ることができるのは、文学研究の分野である。そもそも、現在の私たちをとりまき脅かす「大きな物語」の原型は、すべて過去にすでに語られたものなのだ。そのようなアクチュアルな学問の形として、文学研究はある。